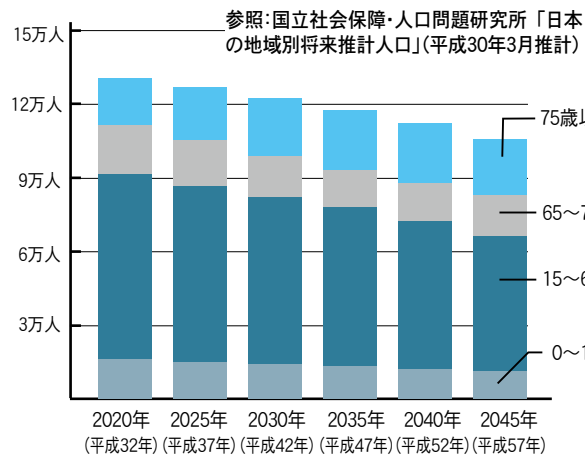
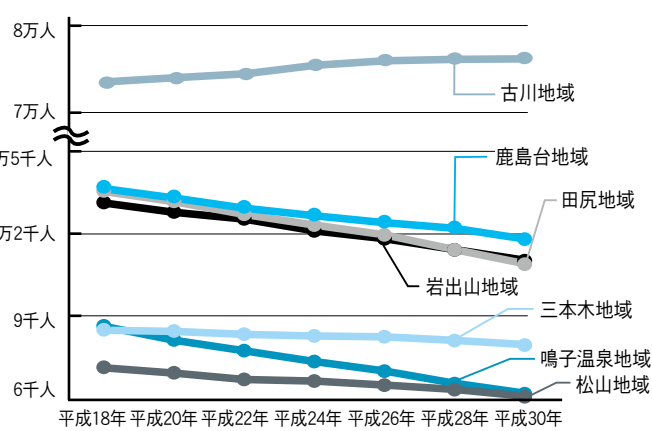


■大崎市の将来推計人口



■大崎市住民基本台帳人口(日本人+外国人)



移住者に 尋ねる

2年前の春、東京都から古川地域へ移住してきた大倉しおりさん。移住と同時に独立し、現在フリーデザイナーとして活躍する大倉さんに、移住のきっかけと、実際に移住して感じていることを伺いました。

「以前は、仕事第一の毎日でした。時には早朝から深夜まで働いて、満員電車で帰宅して。このままの生活で10年後20年後、満足するのか、なんとなく不安を感じていました」

そんな時大倉さんは、たまたま出張先として大崎を訪れます。豊かな自然環境に恵まれているが、ほどよく町が栄え、仙台や首都圏へのアクセスも良い。「ごみした都会より、暮らしにも仕事をやるのにもちょうど良い」と感じたことから移住を決意したそうです。

「地元の人の言葉が分からなかったり、自分の思いが伝わらず、地元の人との壁を感じ

じたり。地域になじむのに苦労したこともありました」。

親戚や友人、知り合いが誰一人いない地への移住。不安を抱えたこともあったといいます。

それでも、徐々に交友関係が広がるにつれ、地元の人からの何気ない気遣いや声掛けに、人の温かさを感じたそうです。「雪が降ったから早く帰ろう」「今日は遅いから明日の仕事に回そう」そういった声が地元の人から聞こえたとき、仕事ももちろん大事ですが、その前に暮らしが前提であることを痛感しました。家族と過ごす時間や好きなことをする時間、その暮らしに温かみを感じ、自身の生活スタイルも変わってきたといいます。

「人の温かみを感じられる風土であるからこそ、都会で疲れた人、移住を希望する人には、ぜひ大崎をおすすめしたい。私もその一助になりたい」と話してくれました。

「『よそ者』と見られている

な」と感じたこともあります。長年培ってきたものが変わってしまう…。と思う人も中にはいるかもしれませんが、ね。しかし、多くの人は、大崎が好きで移住を選んでいきます。いいものを残していきたいという気持ちは同じ。分かち合っていきたいです」

今は、自身が求めている暮らしのカタチが見えてきているので、「今後も大崎の魅力を地元の人たちと共有しながら、ずっと暮らししていきたい」と、笑顔をみせてくれました。

移住者
大倉 しおりさん (東京都から移住)



豊かな暮らしを 守るために

市の人口は合併から12年で約7000人減少。今後も減少し続けることが見込まれます。人口が減り、地域の過疎化が進むと、わたしたちの暮らしにどのような影響があるのでしょうか。その解決策の一つ「移住定住」を取材しました。



合併から12年、市では総合計画に「宝の都(くに)大崎」ずつとおおさき・いつかはおおさき」を掲げ、魅力的なまちづくりを目指した政策を進めてきました。しかし、国立社会保障・人口問題研究所が発表した「日本の将来推計人口(平成30年3月推計)」によると、今後、市の人口は減少し続けることが見込まれています。

市には、豊かな自然環境、優れた品質を誇る地場産品や伝統工芸品、全国有数の温泉地などの観光資源、魅力的な人材など、多くの「宝」があふれています。これらの「宝」は、この地に暮らす人々がその価値を共有し、古くから大切に受け継いできたことで守られ、発展し続けてきました。

地域に暮らす人が少なくなると、豊かな自然や農地は、管理不足によって荒れ果て、伝統工芸や地域の風習は途絶えてしまうかもしれません。さらに、商業施設の撤退や医療機関の縮小などで、日常生活が不便になる可能性もあります。

差し迫った人口減少の問題

に今「移住人口の増加」が解決策の一つとして注目されています。

市では、平成27年9月に「おおさき移住支援センター」を古川駅前開設。首都圏はもちろん、全国各地から寄せられる移住希望者の相談窓口として活動しています。

田舎生活にあこがれる人夢を追いかけている人、生活を見直したい人など、地方への移住希望者は年々増加しています。実際に、おおさき移住支援センターへの相談者は開設時から3年で521人(平成30年6月18日時点)。移住者の中には、子育て世代のファミリーや都会での仕事を退職した夫婦のほか、単身で移住を決意する女性もいます。

大崎の豊かな「宝」を絶やさず、地域の風土を守り続けるには、この地に魅力を感じて暮らし続ける人を招き入れる必要があります。移住希望者と共に歩むことで、人が人を呼び、地域の活性化へとつながるはずですよ。